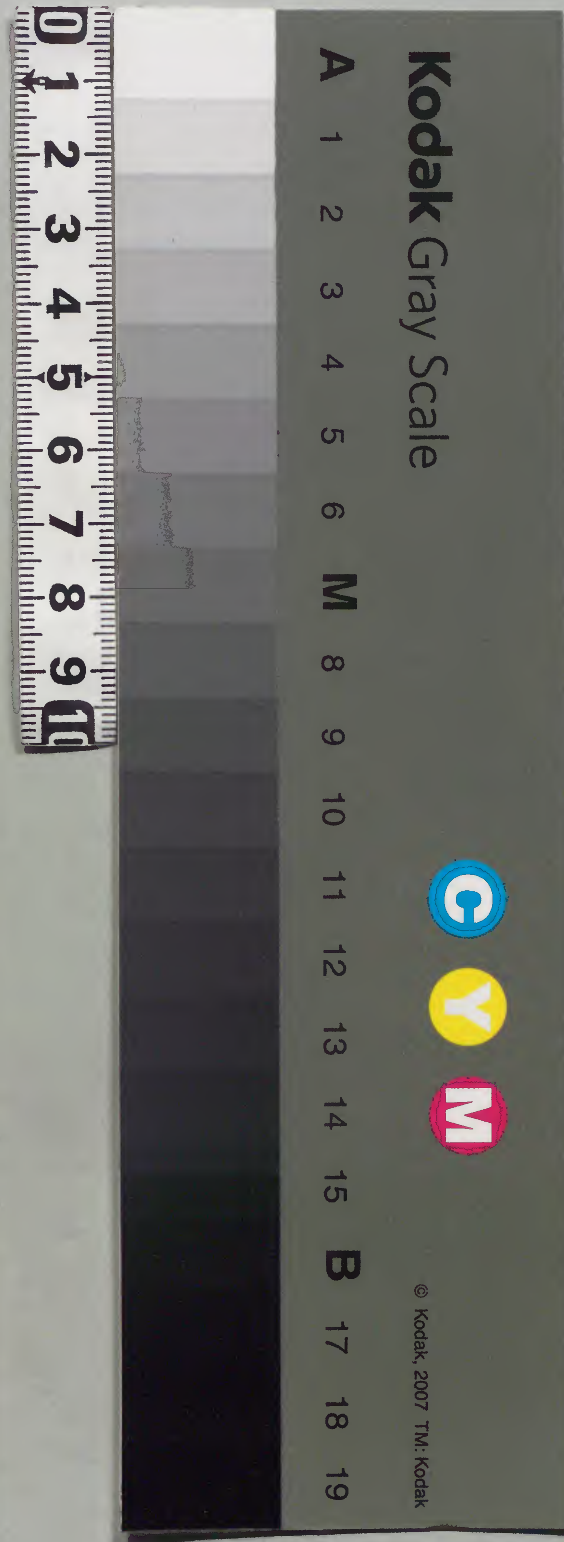
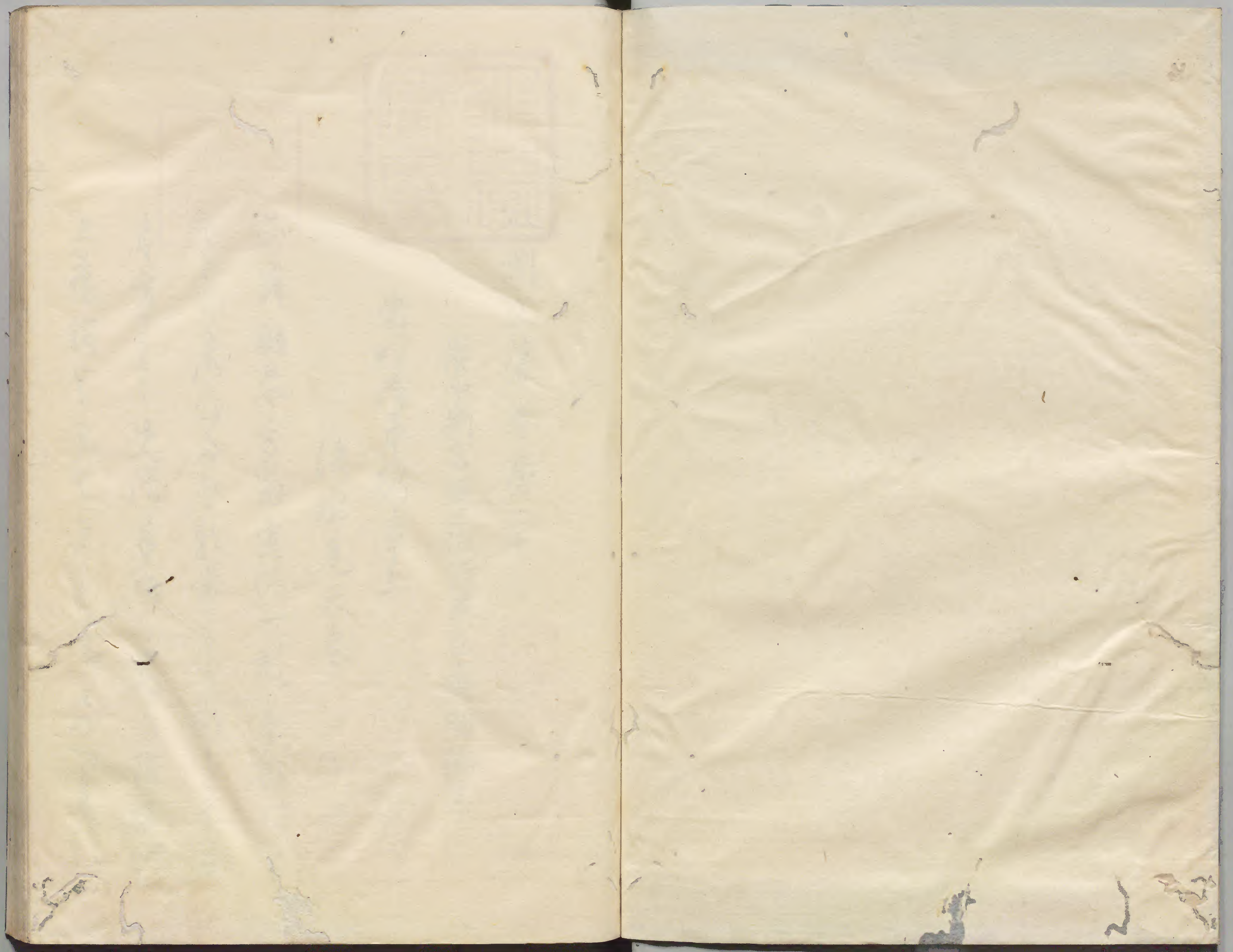


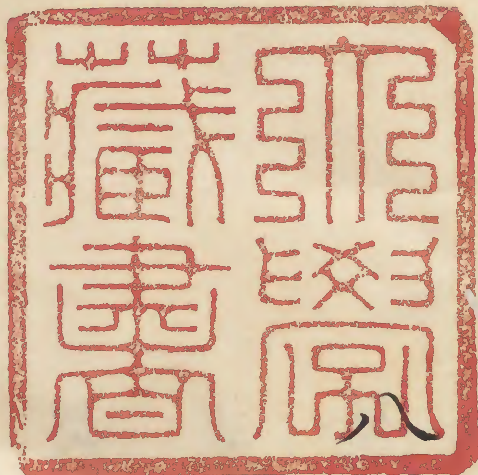
八洲文藻卷第二十

内閣文庫	
番號	和 18283
冊數	88 (21)
函號	204 259

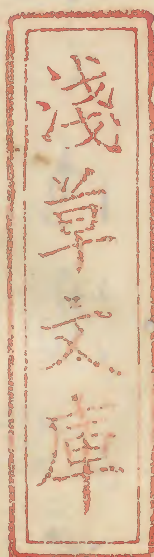
内閣文庫			
三	八	八	和
四	二	三	書
園		號	
八	八	架	類
架	冊	架	







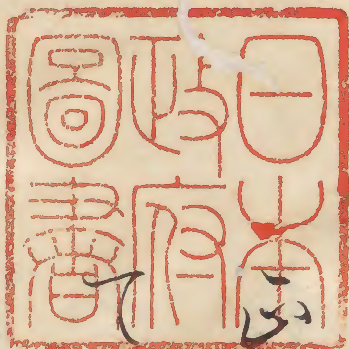
洲文藻卷第二十



權中納言從三位源朝臣齊昭編集

當時中納言上

後水尾天皇



月朔日方相宣の一刻をれは

より清むるが教常平水

は方より先水多ありまある陪孫の

上福禱よりまき清あふ

手長是し襦きしるもさくし水手洗
もそて来る陪膳しつて湯煎半一星
次も出らるるに梅^梅れそのをそてする
軟湯を水球もして後湯湯を信以
すれりる半一うれしと湯を
そあふ刀自こはしと湯湯
そあふし水も水もいせんれ
と湯湯及半一むしと湯湯れ冷

暖を減しゆりるを中さけ
湯湯及半一後そあふし湯
湯しゆりるをそあふし湯湯
れともあふし湯湯のゆりるを
れをそあふし湯湯後と湯湯を
湯湯をめり湯湯ゆりるをそあふし湯湯
ゆりるをそあふし湯湯ゆりるをそあふし湯湯
ゆりるをそあふし湯湯ゆりるをそあふし湯湯

あちんまるのうしは清涼殿より内
侍堀をおくは先よゆく次よ勾當
内侍晝清座の清劔をさしこまぬ
る清後よ女中清供を何し袴た
かり若也袴より十廿五まで清涼殿の
壯女うしは清束帯者装束二人
糸のうしをさしを智の義人なはあ
よさうしは装束女及あ目取あは清

あよ水糸のうしは陪後人はあよさむ
よ長糸のうしをさしは装束をさし
洗代申よ入椽女蓋をさしはてそ
中よ深草土器一を俯人のうしはと
らさぬいさしの中へ拖き給はは
まはよ陪後の人椽をさしは先の中へ
りさしはさしはさしはさしはさし
あさしはさしはさしはさしはさし

片清を拭く大いこの櫛紙を引ふ
伴次は清清の次 出清は母屋に
北才二回の間へ出おし
まて東階へ構へる。お板より東
の庭よりせおして天地四
方を相やせ給ふ四字おれ次第に今
も吉代代のおめよおしるは
多きれいま〜記きいふ友四字お終り

て常の清和よ還清ある常よ
まひ方よ〜あ〜あれおあるに
花を〜梅干茶など供してはさうつ
き余るはあよて女中は通者伴縁
敵をばとめ儲君は同宿四回時又わ女
清たよ〜あれいおお伴也志ら〜
てあ〜お清をんを信以堅固
らち〜の躰たより集る物五回よま

らひ清くよまぬ人節も二百七十ニヤク十五百五
書は日しれ回しこれく文も其強供は
其時ありあは清盤を供はるうゆゑ
也（書）礼ん臺の中央西よせまるくは禱
そかり誠志もてうけとりを供は陪
孫の人こひせしは候も二献ある（御）ん
（た）らん女申ももふ二献の時始し層
蘇白散を二布うし又内侍あれを

役も白散ハ云とより上段の西社れをみよ
置（書）別也鏡の内侍もらん臺の（は）諸をく白散の
もにきしきあしあれをく本路
をく陪孫の人れもにきしきみあし
節も成系し二献の時うあそりをさ
の人いつれと天杯をあふも後あそ
うれを供は永正の流さ節もよあ
十ある是毎の供しきもみえたり也

以て朔日二百二日七日十五百斗之節これ
ひよ不若給此のりて又下地のとみえ
より但代始よりして着清しぬるあり
上箱中箱下箱いつれももきぬいり
るや——くもきりて斗をさふり
き——出さけよ置若坐其後釵子とて
——^音箱帯とありをかく禁秘抄
よるこれかこをあら二位ゆと六釵子

斗也かとあれを代若省略のり能
みあれいの上箱ハ箱箱ハ入る北面斗
候以中箱巻盤不よ南向も候と下
箱ハ同所^{あり}と北向も候とあれを巻
盤所も昔もわかすもてを記せぬ
南向とて東よ法坐を^いあまらぬ
采女女官等巻盤所^{あり}南の妻戸よ
り入る馬^次頭盤金器^黒未のもの^黒を臺

盤一折れうしよとり並へ〜次才も借以
陪儀の次身い今に相續志〜よらなる
い傳くこれとがけを〜の名性な
〜ぬら〜志る〜か〜陪儀
の人は著を〜撮り秉燭のほ清
祝あり清張禱亦さげを〜あこ
勢をかさ〜めり其をぬら〜生
氣は清袍平縮生氣代方のきこをそゆ法
なり孝長れ〜一を志や〜なり

をかさ〜めり帯は清衣西の束代三一帖
の清座よ生氣の字よ向いて志や〜
め終上らぶ中福下らぶ〜張
禱よささぬを志る元ぬの下ふ必紅梅を志る用
其禱代入〜小そて也
先あ〜は清をんを借以福とらぶ
清すれど〜る此土器よ〜同〜かそ
〜あをいおほむ〜志る是れいもぬら〜元ふ
玉極衰微の時長なり
初〜を嘉儀をら〜あ〜今〜を〜を
彼清すれ下〜福の専用〜めれかれいおほひ〜は〜

次もこもく清供を次も二の法盤と供
片陪儀代人強供清の先中央よある根ふ
かを二とあり者れもにこあ一折て出
こもく清の上よ置こもく又清前の方よ有
こまの物よこれを少こもく同こもく強
く清供より一置こもく右のより一
取れより次も清著をこもくめ給ひて
二の法盤よあ。土器や左れよあ。

一め給ひて強供清を少一清著よ
と置こもく土器よ入又二の法盤よ有菜羹よ
こもくを少うよ置こもくをまゐる次より平
の法盤よ供こもくき然こもく供以甚根
中央よ二とれ出器よつを片取こもく
まよ深草出器こもくまよこもく九をら器
こもく時都合廿七款より一きこもく葉成お
かよ陪儀の人たより平れ清盤を拍

清涼殿拜つゝもくもくおしくれ一程よ
湯湯及の上り此後女内はあまは時女
りもあまは便宣の所へ陪儀のまを
おのくおぬをいぬ起し常女小袖
よ袴斗城着ひたしこま向きおれ
紅梅二をあまのこり起る此の時毎度
上君お後也お
のく着坐の後陪儀女人坐を起し母
屋の壯女間を起し清涼よまきしむ清涼

此の
女南の言ハ替りて候は長の内
侍同く坐を立し座を起し申す
候は清涼を起し申す
口よりひしに出しむら清涼はきし
長女内侍もつゝ内侍もつゝま
まもあまの陪儀の人よまのり
儀はあまのおお次も初献おのりと供
ま清涼を起し申す初献おのり

一を清茶よ置次は籠子をとらて茶二
盃の時清箸をさし清盃をとる一め
給ひまる一はんは間も長の内納
底もある小盃は清盃中央よまをとり
る母屋の南の間をなすまらん盃
中央は間の東は櫃のもとにおく陪張
清盃を籠子にそくそ底も出さず一は人
の坐のまゝ置るとは坐もはくも長は清

下をこよりて次才よりは次は清盃
をとり茶の初献はい陪張をとり茶の
初献の如く陪張をとりて清茶は清盃よ
居次は二献を供ひし川者を清茶は
方へ押やると二献を中央よ置次より
一をとり茶の清箸をとりて清盃
茶の一次才よりわけておしい盃出せ
度は三上福を白書内納して天盃を給ふ

きおよそ数あひのかさしきをかこ
ぬうと孫かあうとて清盤よ居三
あん^{清ま}を借ひ二らんを撤して二
らんを中央におく次り子長は内侍
能子成白敷の中とにをて行て屠蘇
白敷をひく後陪張のなとにをて糸
る清箸くく清盤よめる^三三献
目よ清加あり清あは清盤を法取

の言よりのあく女中と終る天蓋を
志記あるのうけり^一た^二置天酌^三
清と^四あり^一結句昔内侍よ^二天
蓋終りて東二の内侍は第一の典侍
蓋を^三こ^四り^五て^六を^七く^八糸^九る^{一〇}東三乃
内侍は第二典侍の蓋を^二こ^三り^四て^五を^六く^七糸^八る^九東三乃
かく^{一〇}せ^{一一}と^{一二}く^{一三}次^{一四}者^{一五}ふ^{一六}と^{一七}を^{一八}く^{一九}糸^{二〇}る^{二一}ゆ^{二二}く^{二三}句
昔内侍の蓋は又人よりの^{二四}を^{二五}男^{二六}は^{二七}清^{二八}と

か—其時をて出—き為之上福分の
人々盃はきぬれち又弟二代内侍れと
うはきしをきひしりしをて出人教
よもろわくはしりし—三度^返も四度^返れり
ゆくちありひしりし^{さい}志もいれん多し平
入^{い元}ち^{い元}中縁もむら—の南々東の
一間の志やう—より出南々北ははり
る—まうん—の南々東の一間は志

やう—より入—給しるたより次も句
昔内侍たも^ま盃^{男の清い}を^料を^{なり}を^をを^を
おのま^いと^いと^いを^いを^いを^い母屋の
南々間を—し清きも進—盃をお
燭のそ^いを^いを^いまうん巻の中央は間
の東は障子^いはあ^いを^い志りそ^い男
次第^いも^い清きわ^い有^いて^い酌^いも^い
ふ^いえん^い人^い退^いく^いは^いし^いて^いよ^い小盃^いを^い

一 家小盃を給る第二下の公公強供
清をとりて志志をとりて家末の人
盃をとりて志やう志やうをとりて退
く子長の内侍中中起起ききむ陪
孫孫人清清を撮撮き後後よりよりなるなること
を次次才才よよとと起起りり撮撮きき毎毎度度かかく
のの事事〜〜りり入入清清女女中中起起産
女女中中便便宜宜けけ所所々々小小ささららきき陪陪供

清を給る。次は清のれいよ〜二の
采女〜一に盃をき急急〜出出器器乃
を能能二二種種ととりり添添とと〜由由〜申申せせははよ
て伴伴縁縁よよ能能まま〜むむとと〜れれもも同同人人役
其其伴伴縁縁盃盃をを二二のの采采女女〜つつ〜小小酌酌え
せうせうののりり伴伴縁縁勢勢夫夫よよらら次次〜女女采采女女
女女官官女女孺孺よよ到到つつ〜同同人人酌酌とと〜かかし
有有昔昔〜或或二二のの采采女女勢勢ここおおのの〜ええんん

さうしてそのむすれ正月はあつて
若期若イ正イに如斯小おねあれは清東
帯を着しめ給ふ四方おねの時も同
小おねの次身は又記し不及りとも
て還清志いゝあるそ若合合イの
るの由を中せよ又清涼殿へなすりま
しと清東帯ありし出清あれは
先因信二人命物二人便直のふりて發

あげは二のうきめあれをやらは四の
采女合カ片因信二人髪をあきて後
劔壘劔壘イを案二階厨子也なすり昇出
て清涼殿の壮女上院は暫く安ん大宗
の屏風を引めしゝ因信二人屏
風を外へ候き出清の時これをも
て織定所の東より出り母屋は南は身
二の間をるゝ庭の南第一一の間を出

く水先はゆく穢りとも杖持は南殿
了出清の時に北色の者も水後平
いゝあゝあゝ故之命婦二人は清涼殿に東
に平然と乃北の妻戸より出く清後
よ新嘗會のよゝゝ又次東ゆはりて尊
をさゝあゝ也を年立樂の北還清
に後壇家奏たすと奏もこれに因ひ
こもたぬ若く大盤所へ出く妻戸に

簾の下よりこもり入く奏は齒固に陰陽
頭を又よりりて日附を定くるこもり
朝の杯をいゝ強借清とあゝあゝあゝあゝ
まよめるあゝ向いさぬよまも陪後等
皆強借清と同し先打敷をいゝ次よ
酒盞盞を借は中央まもり次水右次平
水右次了鏡又中央酒盞次よ水右次
了鉦子集る酒盞の蓋をとり乃

七〇三献するは加木一次第みの撤
き平盤よりかりて撤して米の清き
をいおぬの中へ入る撤を蓋固にばら
れらるるは固かき格子のぬれ
二日何いれもの昭々同とら二奉とらり
きをいれりて清きぬれ有帯れ
清水の上段物のおろ障子ぬれいせ
まじと書せきりていりる故り

袴れ緒を踏ひていよあきてきり
きり毎度うけまされ蓋のばらきとり
そめれさうりぬれりきりてに倍りを
きりぬれりぬれりぬれりぬれり
蓋次より三番ついでにぬれりぬれり
かちりりぬれりぬれりぬれりぬれり
ぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
ぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり
ぬれりぬれりぬれりぬれりぬれり

たもつしつとさるや斗よて撤して社も直
く中福下らふあまのいそとみよりく
このと海くの物をとりかてしとれ
てく女より續うとてく女中か
志りりるあ次は籠子醴酒ををてあ
る三あんあゆるたは益二三ありてひ
と時を次身よとてくはくあ書内侍み
あふ牛飼清礼あゆる清源殿女西の庭

よ候は向書内侍西西の麓をきあ
し出さるあゆめてさくさく三度及り
牛飼を聲を聞かてくあて退
きを扱ひまてくあてあてを供
夕方女清祝あゆめてくはくは盃
はあむ女を撤さるあま今日のを
うくあやゆる女をいあてくあく三
の花を二十日よとてくあてく十あ

よもぢふしん十歩のむいぢふそそれ日
擧ぎし世立春のむいぢふしん當座を擧
ぎし女中ふしんひぢ梅のむいぢ
しひぢ衣裳たより内ぢ女男元志つら
ぢ限し申のむいぢ清庭をふしん書内
伝しをふしん傳ふ

三日阿しんむいぢふしんむいぢふしん
きつ方ぢ清祝ふ同しきふぢ女中阿しん

よぢ梅むいぢふしんむいぢふしんむいぢふしん
のむいぢふしんむいぢふしん

四日阿しんむいぢ物同七むいぢのむいぢふしん十四
日むいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢ
むいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢ
むいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢ
阿しんむいぢむいぢ今日より一帯の清庭
よしんむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢむいぢ

燈を先給ふまゝに清禱を先と
ま給ふも水鏡斗まゝに清禱を先と
らる上福を長の中福にひきまぬを
いひお持ち母屋に南の間を登り清
あふまゝに上福に上福を登り北面
候に若坐れ後かけ帯をかゝ下福を
ひきまぬを若く之の采女采女を若く出
さる水鏡を中の口よりとり傳へて次第

は借入先一の清盤次より二女清盤陪儀二
の清盤を借入もして清飯のあふ有次
はきまかのかをかとか一先給ふも水鏡を
をとりあつれそ一の水鏡はおのりめ
給ふ次下福まぬをいぬをて禱禱をかり
若くはけ等も借入を後きこめ
たより清湯まぬりて次第も撒き三の
清盤を掃く時より下福等もあつれ

此の次の次つぎにちりぢられるぬれはせ
る、采女女官も便直は所廊下のやね
採よりちりあけてゐるの餅はさき
あゝぬれは盤を毎日のぬれはさき
うれ清盤版のちりぬれは時陪膳の外は人
清菜のちりぬれは時陪膳の外は人
ぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
ぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
ぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき

菜のぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
ぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
盤のぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
七の十のぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
き父のぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
すゝのぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
の倍清を次はぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
そのぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
清菜のぬれはさきぬれはさきぬれはさきぬれはさき
一盤志る

〜〜〜

五日ありしは福をいせし〜旧徳所の
あり

今日、横町のふ秋葉歳なる清涼殿

の西向西より清涼をいせし〜清涼殿

なる〜一ふん葉の女中と有りて後職

定不し〜同く女男元徳と有り〜あり向

書殿より停録をいせし〜同徳のふ同く

徳〜いせし〜同く四のふ〜干秋葉歳を

きよの〜清涼殿は西面より清涼あり

〜あるの〜南のふあり〜いせし〜清涼

有男元徳も南に書殿より葉を〜清涼

〜あり〜いせし〜同く〜あり

〜葉れを便直に所なる〜より〜西面

〜清涼殿

ふの父も年越の清涼殿にあり〜

ふんふん葉葉〜かくれぬく時女中の衣袋にこのふん
葉のふん〜用ふる〜きりぬ

其用は宮門迄持家方より勾書は局
より伺はし川局より一献者その後
の清和より清対面二献系二三人
ハ第一の人乃酌するを正者おのて天
酌して之盛るは清比丘尼元と同日
野鳥丸柳原の外極たれと帯は清和
より清対面はこれより中は清和
中へ後より一席は清和はひつし申は角
の裏一帖を擧げてより一席

一枚を交はしむるは清和
より教へ三日中をたし
より位よりきくも若れ人職等うねり
より申のほは伺ふして清盛を供は次は
さうれ清和のよ中をたし後より一
その流よりきくも若れ人職等を
庶は西中央の間は壯乃若れ清盛一
んまゐるも清和陪儀も長等のとあふ
もあつこの清和は同一四若れ若れ

有度よりと歎中より由傳聞て長録
已來絶ちりし一紙元和九年再興し
よるとは方懈怠かよふ年く初あそも也
その後初あそもくきあは清俊もなき
まゝ大元帥は法いさうて初あそも之先
は清俊もそのを中あは清俊も物の
出ひやうい毎交同いあもみえし
をよあそも道より長人敵も

己盛よりひさし中央より出て終
るも本堂も海よりいしりれをとる
一入は退くあそも退く後清俊を
撤入清俊も外根木あも内をいけ
るもいしはら日聖い武家も傳奏
も定められし後も内もあそも
うれてあの内もいしあそもを以
てこのあそも三人の名をあはし

也其詣礼十者以及たれい以後三也
うれを用うれいこぬあを成居る也院
女中たるとやうくおとるり十者以後
たれを正定之正親町の院一後陽成院
の女中年始よおとるり一時を十者
に及たれいこふ粟をそ急くれい
字内は徳も一也外極一接家院外極
のつた院外極よ書院院家法寺也

僧等ちんじやう清涼殿の北の方より清對面也
八幡宮高本國も清涼本願寺醫師也
らた者、小治和より清對面者
十者奏より初者去夜より清神の也
神事入の清涼あはは後者月たれ
まののく、清涼系一尾中一あり
らあらるよ及引たれい
お三はう元織定所も出佛神字たれ中

たれい
おとるり
本願寺

次して元神子傳養西のやり方より
の〜候以迄起るべきをどうあらわし〜圖
坐より行く養より其目錄をその旨より
その〜坐よりつき旨を置き〜目錄を以下は元
中一ヶ条〜より〜起り〜をうむひ
よみ終り〜目錄を二五元又旨より〜
〜圖坐を下り〜平依以次より入清是
小根本十より〜限〜ぬるかな勿

かれいとして全年大概十のなり
十四年越の清盛者の清和より一五
系系のきり〜ぬ〜あり〜を供以
十五のあり〜ぬ〜ものあり〜ぬ〜を供以
清盛は清盛系系の女中と清和より〜
七の清和より〜同〜父方は清和より〜
清和より同〜次は清盛及の末庭より〜
清和書の三鉢打三鉢打と有あり三鉢打ハ
を存山科

辭をあきくもあひくるがさうしてこま
ちやうせ井一本を清き水にそそぐ
祝の盡よきあきく修理職のこまに
藏人これをもりて清き水にそそぐ
の下にそそぐ入内侍を清き水にそそぐ
る還清

十六日午のちよりの及ありて物にありて
かちんかちんをきくさるる清淨を供に

清淨禱者ありて此繪像を清三回ま
ちよそそぐ向香花をそそぐ清浄
女中上福を念佛七萬反觀音經二卷
念經三光誦つる念佛十二反光明の
十二反申福を念佛六万反觀音經三
卷念經二反融通念仏光明の
んよませらるる臨終に書出清
かよ同

十七日今日よりかゆを借以舞也続有
清涼殿の東庭左右の樂座をかきよひ
とつよお草簾のけしつて清見もれ
所と以先執の危丁あり小頑るれをき
仕きりの終りて清を分城よふ藏人東階
よ能そみりそを下以かさありて志
里そく次よ樂所を新舞也目錄を指
る東階よ能そむ右也樂人二人階

下よきみり目錄を指りて志りり振
舞三折等常也とつまの右折家言見
物よ系りて清お伴て一止んありて去
の人藏人五位或敵清ありて清長清也不
しあり

十八日今日よりゆめ城借以三練打者又曉
よるれよ何しつら場代てはるあ
り新編よて清覽者女中看盤所も候

そよふは侍臣ももき能くは候は大夫と後
者を居して集りてこ持ふりか
太鼓等もあり事をも常の清所
よて一まん懸ゆるらありて候は
花等もよて清祝あり

十九日清會初あり題兼日觸るる字か
と白當因縁存ありてありて入る親
王かるといふ字より傳へる指家方同の

初大臣指し和歌の存あり傳へる
其の外に和歌に存あり折紙ひきま
ねてあれきとて之兼獨り比おの
糸ありまね生の清福ありた何一あ
出め候きとて其は清原氏の北は方
西面の清原も若御は留りて候りて字方
指家方若御
法中い志ん致とて毎交
不系懐紙斗志ん上 次よ讀
師は氣色もよちて了鎌師若御次よ

鼓聲若生次ノ講願の定規の系
まゝの講願を以て各退次より清字梅
家字等起坐常々此所より一寸あり
字方同様の梅家流ぐはお伴を以て
清涼後より細益あるをうらむはと
まゝに
廿日あふあをる魚ついでおらんを
此祝ひ共々い依よなまゝにうらむ

里

二月朔日あまの清きんせつにてあま
清きまゝの女^侍係四月四日あまの
船泊るる夕方の此祝あり大抵四月
も同く小さく月白ぬたをた記斗
也初献 まらん正月にささぐれたれはを まゝ
とれを先はを たあ
まゝのらんこあぬはあのか
まゝのらん女中まゝの上福中福

分より清きあましく下福よわめけふ
し給ふ也又初ききめ成り
きよき急きあけ着をほく句書
因持者の名よおく是名れとられ料
なり二あんほまれを供ひる時初らん
清友せいたより押寄り二あんを中央に
れく初献を撮せし時毎度此定也
三らん後の清きつり記きく女中此人

数かた土器をあきあきし清盤よき急て
そて集り給ひて玉盃を給ふ一記爲
也句書因持とて間中福多三後下福
ハ白地土器たよりほき重る時ハ次より
とれ土器をくしおく三あん物を供
て清きやうし出り清盤集り時ハ志
ろきめけらけ二もの多め取れけて
下たよりあましく集り正月より清き

ふも垂後かよりくふいさうめいよて生
の清福入りてさそく清光は女中當
坐より有りて清光係りしひしと鑑子よ
盃を急ぐは志のまき出しく清光よ通あ
るなりこのむしきさめのかうれもは
時とも出さくは外にれえ目も同

十五の清二間のむのし方あ壯あ西面よ
涅槃像を懸くあり机を置香花佛

供饌等をそかふ又佛前便盆此有
柳の枝を立く持物杖かく供清の
清持お院女清清所くたさこのはもち
ろん女中内く外根く書紙案女女官
まゝるまてなりあつたこのは杖
佛ありあく少のものをハ柳は枝よ
はく垂燭の後日記のあはのまは日記のあは
おる或はあはるは日記のあは
みまをあ持あたの園よりあり林の中
年あは

よるゝ院女院一清持との集る般舟
三昧院一杉原十帖爲子一本集る
女中一京より一解集る下紙有

世二水無瀬宮の清法樂有一般清神
事之清形有これ後月世とあり此人清所
よまわゝ一局よ候とるゝ兼可或ハ清
書望時宜もあれ但大概ハ急日也四五
以前題をくゝとるゝ紙を柳清舎始と

正月十九日よみえゝり短尺ハ小高摺紙
一枚をくゝとるゝ二片よ折ゝ色て上下
のあやまを押し折柳笈よとるゝ水月
紅と結ゝ札字はく水無瀬及清法
樂本ハ世二此定也當日おのゝ詠を
此短冊をとるゝ集め次第よ重子て観の
ふゝ子と急ゝ帯清所ハ西ハ清望
おく清形水集りて先毎朝ハ清形有

次子清經（清）の法直衣（清）たるの法直衣
若水水無染字のころよ向をせ給へ
よき阿もとせぬし微音外へ聞えを給
福也亦三百以来鳥味を供は
廿五日聖廟法法樂有清神の以下
水無染字法法樂も同し經冊の札を
聖廟法法樂末に廿五日は定也
三月節の毎の二月節の同し

三日あはし清意系る歌るも同し閑鷄有系
日極福殿上人の福福もよ同して各鷄
をもを上片牛飼も人系りて鷄を合は
高やも戸もよけりもあはしこれひよ
里水覧有阿せうれをすめる候れ也し
夕のこの法いもひ有也中今宵は法と
う法もよ二つ禱也初ま九は法法ありよ
よありて女中もよふ三は九目の益は

正月のよき句當内傳まて天蓋とふこ
らん目れちやうに梅の花をきこふ
てハ此外これ朝日と同——日記湯湯殿
の上れ日記ハ己の目よあしこころの時ハ三月
三日ハ湯人形集りて湯たてをの湯を
とつ流るゝ出るたとやうあれと妙はわ
あしれんこ己の目斗よふか^{たて}つるたより
慶長のはまてハ賀安の両家を上げし

かゝる賀家の新絶——ぬ今れ陰陽歌よ
徳井ハ賀家の庶流たれと不堪れる多
——陰陽の歌ハ人形をなりてハ叶をぬ
そのたれと傳受ハまづれハ是非なく
てしるゝ安家たれとそ進とそ人形ハ辰白
志ん上——ハ妙湯たてて夜を起せし
む是女中ハ妙湯也そやうねり結を
方寸解よ裁——ハ角裁とカよて穴を

あきく人形をうつひつをい入
緒を刀自より二つおし折よりまて
結也かこれとて清枕かまきね
を置き響る己の目れ己刺り中出せ
出さるぬあれもをたはすて清接物
清接物一とひきまき整所れ妻元より
因縁出はなす清接物の上の日記よ
あれと今とておとせりてか

月己の日と人形をうつ也
四月朝の毎事ぬ何きよりおき炭
の火鉢此名自君の火を撤はあよひ清
盃より女申よりれりねつえりこころおき
ひつを惹て然月諸社の祭多きれを
今とてきる神事ぬ折後茶出陸
清記の改たもてさかふ六日吉の祭の
神ゆえたもてみりこれとて以て神

事代沙流七葉一葉茂の勢其日社司
若葵試執以あひ七葉をつつて
かたて枝と付く葎の壺とて以也
一間は二折片の無る也

十六のきより黒戸とて夏花を付
まきく上福分の人はを勤伊勢
内侍の三葉は日二葉月二葉賀茂
下上二葉つて貴船春日任者平野玉

津島祇園稻荷多賀山王八幡清靈天
神以上二葉つて諸神七葉荒神親音
爰深不動文殊虚空蔵地藏聖天葉
師毘舍門大黒神迦阿弥陀以上二葉
片諸佛七葉清光祖七葉六乃三界
宍生七葉此外亡者たもいしあふ也
次来也町屋よりいきて也
五月節百毎り如常

四百七十九 婦ハ至及寮婦トとあれとは以
と丹波國小暨こいし不より敵以同下の
者数多ありて清及毎よふに後ま
あや幾の梳ハ以ハ包ハ一對ハあよひハ清ハまハく
らハあハまハうハひハ包ハくハ極ハ弱ハ細ハをハ以ハ水
梳ハをハ白ハ當ハ内ハ侍ハより出ハまハとハ之ハ甚ハ梳ハ音ハ蒲
をハ多ハきハ五ハ六ハ寸ハをハめハりハまハ短ハりハてハ五ハ寸ハ也
里ハ斗ハよハ即ハ先ハをハめハるハむハありハまハくハ結ハく

あ方の小口よみまをら一校也

平白あ一ものものをちもたを借入給
盃箱編等何のよ一きあハさハうハ婦ハれ
は湯まぬるよハれハさハうハ婦ハれは梳ハ一對ハを
為ハ箱ハよハ包ハちハあハらハめハれハとハにハあハれハと
うみむハをハ引ハとハ短ハくハ清ハ湯ハよハ入ハ水ハゆ
あハのハはハるハ統ハ清ハ湯ハの中ハよハさハうハ婦ハいハみハえ
ねと白ハいハ甚ハ一ハ清ハ涼ハ殿ハの東ハ庭ハ鬼ハれ

るの通り又高欄は添くせうぬれ清
殿と云物然るものあやめのあたる
倉―あやめら―六府の沙汰と見え
考れといふ来事も然れども東坊城
家より材木下紙等のもを出し
来きを―造り―めてあれをなす
又内侍所の西より考れは梅ヶ畑
と云ふ材木を―出―て是も諸士

清くして徳をさる也二も同―下
を清く―をさる也然るも
る一也日以前は清くより給さる也系
所のときを市帳の右右に柱に結
ひ結くたもこの年の年中紙事と
あれとはは沙汰もなかりぬ
八日今宮の祭はれは安家物忌のふ
を造ると清冠の中子の中よつけ

らるる子孫の清和の女中流もたまたま
えゆひに清く洛中の祭とにわりの
あはし

十五日夕も物忌の符もある

十六日清祈禱の符も同

六月朔日きよしあしあのをあはし
あはしを借入夕方女中流も初
よきしあしあしあしを借入二献を

借入の時初あしよきしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし

七日神園會あしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし

十四日夕も物忌の符もある神園會の

清盛あしあしあしあしあしあしあし

あしあしあしあしあしあしあし

十二日兼日各嘉定を多ふ院女院扱へ
む勿備ある清雨へ扱家言門始方共
外へ時宜よりりてこふ定り書るやう
か一為りたしこまひまきて嘉定何ふ
て七種こるこたうこ水あつ供以親
玉湯回宿の時女佛やまを在時水相伴
たより清あを撤して後女中各う
を持来しこ水あまこ給る今日女中

能衣蒙きし一義女福りあま記字
きるこしこまきハねまよこまよ
しよこ思ひこ也内こ女男尻ハ兼
日長檔よりあれをよ何こ兼る者
の清雨の南面をとりをれちこ
しこやれ口との間よ翠簾をのを後し
て女中見物の不こ男尻おのこ思
ひよあつしを持来しこ能こ

候以公々一列殿上人公々女々一
又一列也上殿の南に公々女々一
を志うとあまを清見物なり
り退くさつたまこれの進出
元女堂より若く位極人極子さうれの
臺たさつたま出さつたまあり五
器たさつたま出さつたまあり五

あつたま出さつたまあり五
あつたま出さつたまあり五

晦日きふ清ゆきまのり清くを
洗ふあつたま出さつたまあり五
是を個々典侍二人出ゆきまのり清く
あつたま出さつたまあり五
を湯をけあつたま出さつたまあり五
をあつたま出さつたまあり五

清ゆきるの人は水くさくさ乃水の清ゆ
をくさ清きれ月の梅を調進を因
伝所の刀自とりつゝくさ巻盤一和乃
巻盤のよよあく清引直衣先せつ
まへて箱籠れ水空よりくさあはれ上
福き人例のむなしくさぬをいひきき
清前もくさむき巻盤の後うけ帯斗銭
かく中福ひくさぬをきくさ巻盤れ本

ふくさく梅をいひ麻の葉さくさあはれ
竹をぬまへて麻れ葉斗を梅もあはれ
添て水あもくさくさ上福とらまへ水空
のよよ巻盤のよよあはれのよよくさくさ
まへ上福梅れをくさくさくさくさあはれの
清きあはれ入あはれ清きあはれ月れ
あはれくさくさくさくさあはれあはれあはれ
ふくさく梅をいひ麻の葉さくさあはれ

よなるしふもやわれの後成恩寺園白
の事根元抄もはひのめれされハ
いふ海苔より世俗の者きこひとみえし
ま上福をいさめる福をおる一を
る福二つを越えしゆうしつよよお
そしまた地定よこ及びしやわし
清きよもし止給しる麻の葉枝枝の
上福福もとりそしと撮り次み入清を

後巻盤のうなる福を女孺とて清
不よもくまるる女清をいあれは三
間とて典依りれまるいそ外れ女中
い清きよい。少人えいしぬ人。むく
きぬを悪ひ彼者月れとこらりの人な
とくしり次身よみそし後福を赤の
そのこよとて由しと巻られしるふ
位代極人便宜せ不よも集りし福の

をとも候以用く諸男尻次第より出
蔵人も痛をもせき入りのちを
蔵人志りしと痛をい又とり入る
くくく采女女官女孺物くるの
女官友女よるもまて入れ入をとりぬ清三
間のもれしと蔵あけしと清三
たかめさしと清三と清三のりめ
諸女中若坐上福一列清三のたは

西上
南西

申福一列の清三にむの南上例の

一 陪孫子長坐を起し先清三次
よ初あん白乳を供し清三まぬり
女中の中回の次よりらん 唐乳を供して
以後男を居る公卿をき孫と女をよ
はく殿上人はらわぬ女中のらよ候
き次よ蔵人尻をきし出さぬの
一 齋をこよふに座たぬ殿上人

此の世に末より一人はく居出〜
多ふちや〜出て出着り〜おの〜
是も應氏は間敷人出着の〜おを
この世乃ま〜置は置ま〜りてあ申
通る下福の酌た〜あ〜家来の清
志〜終〜後伊豫ちや〜置と
を拵て出着人あ〜あ〜あ〜あ
あ〜是を取て男よ〜あ〜あ〜あ

この清座にあ〜殿上人ち居出や〜
と〜公の世をりて平依次〜
清女中起坐次〜男退下

七月朔日夕方其清祝等如例

七日梶の葉も歌をか〜め終ひ〜二
星よ〜向〜川直衣〜三間
の市坐若清陪儀の人例れきぬをい
し〜し〜市坐若きよ〜し〜し〜

をこのきき候は内侍也。しきぬを若
て法硯をもく集るる。其極重硯の中
の硯七つをとりて出。一廣蓋ひろがせを二と
取。まゝかゝぬ上より下四つ也。芋いも葉水
を一つゆひく。むらぶこの上のすけ
水取のすけ角かどをきき。新し記しき芋水
管墨一抱を硯の傍におく。梶かぢの葉
七枚をかきよのおり。枝の皮七をとり

そとをらん七をとり。さく候二つを二と
よき。急く法はふ葉よおく七の硯よ芋
の葉は中なる。水みづをそくかき。給たまく
書をきき。梶かぢの葉一枚はく。とりて
をうせぬ。或は當坐あうざの清製せいせい葉或は
古歌ふるうたを扱あつかす。硯七面をうう。一首
はく。書かきをきき。さぬ。古ふる葉はなり。七しちそそなり
為坐あうざの法製はふせいなり。一いっ回
一首を七枚
新書しんしょなり。陪はい張ちやうの八はち梶かぢの葉七枚をき

ねく常儀二成中より押一毫上下
を折くあちの本のは七筋常儀七尺
ちをもち十文字と押結ひし出ひを
里女官便宣の所せやひよりちあ
申あるものよらとをいひしは採の
かきし折りの毎度のしつし清観を
院女階親王女侍等由坐の時次より
まゝしきし清もの一各系をま

たきもく集るきよの法料やそあ
日比田上福よりちの編を補進せしむ
所よそ女中宛よそおのし神の由
あしる至正形も志ん上あれと由神よ
付らるるものよら一ニ親ある人む
痛三金銀也か親ある人む痛二金銀
二親ある人む痛一金銀也朝儀等
也何夕方の由祝初より後清汁を

借ひかきつけよ水汁を清めれし後
お清に三は終ひ此の集る又二口め以次
よ素紙を借ひ出れし清着てし款
次に清益する二款徳三あるなりを
借ひ女中清めのききよ書をいそ
ろくたかきよ素紙いそあよ三らん
の唐紙と清益よいそとて出る一齋
清の多し今扱かしの和歌巻題よそ

各誣遊を穢せしむるまていかなし
こゝろかき掃く置くし斗也毎年一首
懐紙の多し昔は懐紙あり同清遊
者向清清不作堂上地下の楽人何
候盤汚物七也但清遊ハ者無不定之
清めてしき益ありありあり目限
不定也兼日字の清比並危ら尻内
の男尻ふれしよほされし何候未

早稲町の院は清時より高門の清
比丘尼等何候御あり旧院の市時より
一交ののく何候御より今出川前右府
晴季公振より座より新とて也
其後におのく君をあれと祇候は
長座窮屈く暑氣中なるよよ
里々軒砂者也そ故より日をうて何
公ありは是より三間より二らんよ

里々乙盛より天敵まよりなり各何
候の時より十一より十三らんよ及んで相
河きをねるより新よりありきれと
たより今よりよりよりたよりありと毎度曉元
よ及座以下より座よりよりより
やうこれ目より同より女中おのくまる
きよりよりより先初より新より
らんよのりより女中飲とあり二らん

その中より一より供へて後男をぬ
きよむるは此の世より一よりを
公取のまじり居るは一より及内侍法
前の法計をまてまぬるは此の法計を
こよはるは一より内侍中よりをまてまぬ
るは此のまじり居るは此の法計を
かゝりつ公に給りては意まぬる女
中と申すは後藤人取とて公に給

かゝりて殿上人は公御の法計まてまぬ
出へては此の法計をまてまぬる
は候き三つあるは此の法計の上宿乃
酌也女中の座をいさう出さく女中
公御以下は此の法計をまてまぬる
むきんは此の法計の上宿の酌也内侍法
前の法陪儀といふの法計は同一玉
あんをいそめんとらんは此の法計を

わが侍中もくもくもふみぬ月れお
とく著りりく後各給する状度
い又次の典侍の御こと上福分の
人不足は時向當内侍人敷もくもく
也七まん様を借しと後五を急
を借し内出の支れとくもくもく
々の敵也第一中二然いを以公卿中
のて鑑人たり女中、産たつと男を

先一出さる敵の人れもあに次の人敵
もかする也常々事と天敵の比よら
ういひたむらういむらうの産れま
しよ出さのものに出るありと敵の後
も知事さのひよらうとあうら
て入侍さか月と同

十四日あくよらも燈籠を正しと二親お
具一もくもく人本伺候とく燈籠の火

ともひ

十五の今日もさう入の火ともさう
の清祝水之間よりさう清座を
此座以下これ月も同先清座を
き上福中福を何の道へきぬを
てあさうけ帯斗をか下福へ
初めをさう初らん供座の次より
水盤次より清けを次に鉢子出臨

の人をその供席の緒をさう
ろげ又ちひさく色さあるあは物
のうちきよ水さう志んたれハ精進
のものを一程是も緒をさう
く水さうをさうせ給ひさう
次より水盤中なる次より清湯の
をさうさう水けの水盤をさう
さうけ水さうを給ひさう清湯

ひなの事れとていへ入是を一帖とて十帖を
ね格系此等のことと又同多るを考みて格の細と
そる也細のつけを思合
格の次身は調るなりふをいへ一帖のみを
そる也とていへる陽のより申高たれ
十帖は清元集の句當田侍よりいへ
十帖は帯二とていへる藤島井よりいへ
短冊百枚柳篋よりいへる高倉よ
りいへる也とていへる十帖は清元とていへる二帖
まゐる水無流よりいへる清元とていへる一本一

ゆひ第二本集の典葉紙よりいへるまきわふい
丸鴨の社勢いへるに格志ん上はは等
とて大うの定りていへる也とていへる外格家と
大概清元を志ん上はは人の名字然
う格を格を付札本をとていへる也とて
た刀をいへるに格志ん上ははは等
刀志ん上也た刀はは清元の中出とて
を上の分て格志ん上ははは等

内侍より入武家の傳奏をうけ也元々
た刀も志ん上とみえこり日記ゆへの
上の日記杯も銘を記しあり
以下り中出さるるりり馬に左者
馬寮の官人引く出し物飼て清見
あり此器より高檀紙十帖より
枝は枝は盧橋の七なり物作のこ陰陽
頭札志ん上此殿の柱を押し牛飼清禮

よめるる正月も同いあき盃阿むこれ
心等これ何の如く父方此清祝我初
あんに添えをこれのゆはたの借
を是も初らんのうちん月歌る此
ありそち杯の類にまるるやうも同
十書名月此清盃帯此清而も集る
先いも次りあ子を借以あ子を成せ
ましこく秋のましり穴を明け穴

の内を三反着をとほされし由を
いふは、法盈余りし後法衣を擲入
法源殿の東にひきこみしる法
座より月を法覽みしもの菘子の宛
より法覽して法衣ありおれらる
專世俗の流布のしりたるを禁中より
いひよるをいふまはる下とあり

十八日物忌の符するは、靈會の清並

を願ふ一おんに法常の法衣とす

九月朔日毎事たれあり

八日丙夜歌、兼ていふおん女中あり
沙汰とすきし、おん法衣を院
女院清所、女申等、いふ法衣あり
まことぬす、後の法衣とす、おん
ふ化り、おん枝よ、おんひき、おん
よ、おん清障子の内よ、おん内侍等

しきぬ着るゝをて集る常は清所の西
庭に菊を植大あくこれをも厚く以下
は有夕言老の池所をてぬあをま
て一丈ん集るその後西のを能くよあお
りてをてをてをてをてをてをてをてを
綿をたわもる綿抱紙ハ陪徳の人
をて集るをてをてをてをてをてをてを
三梅黄三梅教合九をん至上院女清

申字親王なまといあまいぬをてをてを
の花能くをてをてをてをてをてをてを
もろ黄赤能くをてをてをてをてをてを
まろ也女中と次持集るをてをてをてを
綿まをてをてをてをてをてをてをてを
たを次の人包紙ををてをてをてをてを
地をてをてをてをてをてをてをてをて
りてをてをてをてをてをてをてをてを

小をんねん後以相のくくして置て於
也

九日毎事三月五月等此節供と同
ト夕方の湯祝より女中の尻衣裳
二ツ急をこころいきハ程きくうらげ用
お富三志九目の録子よ菊結糸をき
あきくハきくハ一首の懐紙を各録進
き七父と同一重陽此高の字也回院

の湯時九首れり有る及又一度有き
も誦せし新しハナ

十三日八月十五夜と同

十六日湯祈禱三月五月と同

十月朝日毎り帯結ももふより若
の湯不^在越^在のよお紀炭火鉢を置炭
乃とて振るきより女中綿の入る
をのを急利九月中ら綿け入る

をきうひささし時を裕をとり重て君
也夕方外傳祝より張意の裕をきき
るこり

井の志亥よ當る日やあつた箱傳を
んて言猪を供傳りまきをうけするまを
くこ中出ひよ志しこひひ給する也
法利親王方門路比丘尼院大正
等そ外外極流八幡外尚醫師等

いしこ小高檀紙よ色く小かく
急あ引まゆひて取出内は男院
女院二女一の女中出所く此上痛同彩母也
の中出ひた杉原よ色くあつた杉原
り色するはかまをききめ之畢竟
或る貴族の人或は外極れ人よ小
高檀紙よ色もるを給する也ほみ
の中よするものハ初度茶葉と想ふ

と中夜わち中さちと志のふと三度目
いちやうと申ふと中より銀杏葉
出火人の名をあらへ色紙進個イと
さつむかり清く志やうの色に公に
黒四品の殿と人々赤五位の殿上人
より白見と赤地下の児は白花
人々の度よて度も二度よ一多
赤い意
向まふ赤を語る也家を貴覧の故

也女中の上藩はうらり黒井藩は赤下
藩は白備尹の志んまは上藩を初清
和の上藩は赤をあらへ黒はうらり
すれに禁中とて申藩は誰授られ
かあり又依はれをさすも時と依の
水料とて志の志んまを
三つを志んまは志んまは志んまは
ろく清志やうのらちと黒内侍

ひきぬきぬきとて集るまじく縁の
まじく丹波國堅津と云ふより集り
て歎くまじくその名即跡と名付
父方此清^後後も信氏弟士のらんを
其高き信奏たり父方此清此清の
清なりまじく清座等先信氏如く清
清^春まじく清の体あり是あり花
是れ清之當時世信流弟此是らまじく
まじくまじく信信清ありまじく

亥の才まじくまじく信信信信
信清此衣の清袖をおひ清真衣
いなりまじく信信信信信信信
まじくまじく信信信信信信信
信信信信信信信信信信信信信
信信信信信信信信信信信信信
信信信信信信信信信信信信信
及まじく信信信信信信信信信

社をおほふ女中より上臈中臈ハ次第より
水あも〜は〜下臈〜衣上臈、上臈のかき
衣中臈、中臈は
此袖をおほふ次第よりきれたる〜番
清衣〜は〜衣を置〜出
を〜の〜うや〜
る〜、次〜きんきやうを供以南
〜向き〜陪孫子長の人何れきぬ
を〜お〜
を〜

をか〜下臈を〜きぬを〜は〜
と同絆の産正産井の十の外
目と産を〜は〜二〜
〜き〜出〜
〜
〜
〜又西向〜
上臈中臈下臈臈斗〜先法盤次
二〜

とふらふら又湯盃するに三つんのせ
を供ひ三つん目ら天敵まで清き
例のよきくも敵のついで初らんよ
供する清きの方者清き志やうを
とせ給ひ志記のうよれを給
ひ清ゆをよきとちうせぬよを給
それゆき志やうれをよきとせり
但四位殿と人の内清き族大臣れ子

或職^指兩頭^指とも二度の時の三つの時
一度は黒を給する五位殿上人も又
同三位職のいふ職に准授之あれ
ら八家を賞覧のなや又職を補せ
る給ひくも器用を給するよき
親王女清き第一の公候をいふ
ゆきたぐ敷居給うよ物あるを
よきと給するやめるのり清き

あ度三交かき同ーぬれこよ女中け
裳陪せんも長の外ら者らんそめあ
やあとの小袖をぬ次東よ若目也
十五日跡あひまらありるりあ
らこの大概毎年あり也
あれも吉田も仰り清代官あり
新院の時より清和より一交
あり

十一月朔。毎事儀のよー近江國よりむ
し云をのを敬入りより奉りり
きれは

祓まつり四季の間能色より大黒燈の
借もの招きあきり筆をひくきる四
辻を外誰よりあきりにあきり
あきり二張り三張り時宜き也あきり筆
ひくくたれ時を笛よてんあきり

日の出をそなたも以て 煤拂陰陽歌
文よ志こころいして日時を定らるる句書内
侍魚々殿上人をふれ催して各系
可あはれするそ外清麓屋大針兼士等
のも然をい支くれ奉りの人いよし
よよりて集る利限典侍走人もくたぬ
着々劔壘其間代 ともと教書其案お
う二厨子を昇出一 常の由所の由生

のうくよ大宇其扇風一雙引めくして
志とてその内よ安ひ神祇伯劔壘の
間の煤をそく掃除せむゆを
たまりく奉やくく人劔壘をよとの出
きく昇入を後吉方よるひそむ
き然このるい諸士ののそれあもい良
きして掃除せしめ清麓田畠小新禰
或は古物を掃除しきしれを調是

手紙のまゝのうゑに合カさる也此間便
宜の所よりしるすまゝにすおとて一志ん
あま初志んおちま二らん祝儀を
とりて水盆とわけて水あを撮り其
後女中よりいふ湯見舞何れの上御め
されしる殿上人内へ流ハ跡にたくせし
出されしおちんとんおくたも終ふ
湯乳母こまをやらん句當酌伴とと

うかよて水と何一あま其日の女中老女
よよい世俗よりちりとりと云線を
わくく也いりたるよりちりとりと云線を
局よて嘉例に祝儀者内侍所よりしを
年嘉例のしり有といつ也掃除代事
をとりて本殿へ還御者の湯とりて湯
盆あつものそらりかうしやらけ
物三志んあま女中があつめそらり

例の折髪引のつゝき急ぐるゝのよ盛る女
申斗と回る天敵とせりゆいおー清
あせられも陰陽師甚り又よあり
て日時を定るる年中のゆくーお
ち清法の清もゆい等女をのよとら
あつたをく大まかーんーよ色上はが
う操りあせめーをくよ沈番をいし
せせらぬきー色あははららのふいよ

き急ぐる女官取傳く蔵人清士よ
くは昔方も向いそ是をやくゆり
まきぬの色はくは草並ををて集る
きぬの色は女官結る也

清分教らー何れは供儀又おの
清所例の由重よ清益まるるせえ草
かまけを供儀次平一豆かまけ供儀次
よおらむむつ二つまめお入る二つおよお急

てめて来る陪膳三方かめくはあよせし
よみちりむつ二方のぬちを合く二つな
うし清たよもくせ給ひくもちひり
能中あるまめのうしおほひくしる土器
を右のほよもく昔方三反くしせぬふ
昔方為清うしるれ方かき清りし
るさゆよろちめくうらさをくせ給
ひく二方よおくせ給陪膳かきりて向當

よくく向當二のちるはたれよし取取
のよよくうしるさゆよ立かあし一間よ三
反清うらちくは後中清湯及のらよは
てをせうちめく此間よ土器よ入しるま
め清年の数まるる向當帰り集り
てかうろよ追催香をくめかてて
く集るかよめ給ひく五く女中
次身もくは後くてたくそ後向當典傳

又清及申成持るめくる次は雛子出清登
余りて一歩んとあるは其を撮してと
あちほく一歩あくましくはめくくか
る旧傳志よくををちるは先ずる次は
昔むもくまぬ若く清叙をきて余るは後
ハ女中福平若くもさうきの雨よけを
まいて三載余る三歩ん目天酌して女中
をさく清通くあるは清叙を撮して

殿上人清鳥三聲の後還清句當はやく

しつめいとの教を目八年女教
引合のまよおつむや きて余る

刃をたそられく返るる終りてらる
をさくみえるやうに志まそくと故実と
す

晦日清ゆさるまぬはく月よ同く夕方

帯はゆふもく一歩んはまわる句當清と

か一のこ
まれはのわらんをちひさくひよ
まらうは年の教引合一巻は押色なり

